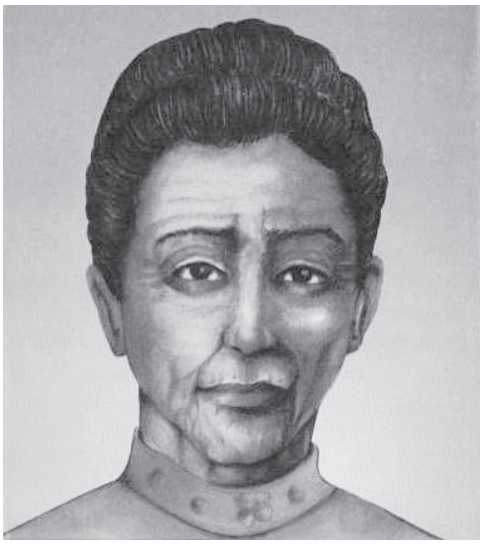
歴史の中の女たち　＜第 14 回＞

マリア・トリニダード・サンチェス
―ドミニカ共和国の歴史より―

伊 藤　　滋 子



1794 年カリブ海にあるエスパニョーラ島のサント・ドミンゴに生まれたマリア・トリニダード・サンチェスは、市囲のどこにでもいそうなごく普通の女性である。黒人だから奴隷の子孫であることはほぼ間違いない。母親のイシドラは教会の洗礼台帳に「自由黒人」と記されており、出生と同時に解放されて自由人になった人のようである。当時、島では斬次的に奴隷解放が進められていた。父親のフェルナンド・サンチェスは、後に述べるバーゼル条約などで島から去った人の牧場を管理する仕事をしていたが、さほど実入りのある仕事ではなく、子供にはなんの遺産も残していない。金持ちは牧場主、役人、僧侶、商人など、一部の白人に限られていた。トリニダードより 5 才上の兄ナルシソも父のあとをついで、不在地主の牧場の管理をしていたが、それと並行して、家畜仲買人などの仕事をはじめた。話上手で冗談がうまく、かつ仕事に責任感があったので、信用を得て次第に白人社会に受け入れられるようになり、カナリア諸島からの移民の子孫であった白人の妻を迎えることができた。妻のオラヤはナルシソと一緒になる前にスペイン人との間にアンドレスという子をもうけていたが、ナルシソはその子にもサンチェスという自分の姓を名乗らせている。当時、結婚制度はまださほど厳格ではなく、ナルシソとオラヤも長男フランシスコが生まれて 2 年後、宗教心の強い妹トリニダードの懇願によりようやく教会で結婚式を挙げた。結婚式は物いりなので、庶民で式を挙げるものは少ない。社会的な上昇志向の強いナルシソは小さい規模だが、農園や牧場を持つまでに至り、 8 人の子供にはそれぞれにちゃんとした職業を身につけさせ、アンドレスは鍛冶屋、のちの英雄フランシスコはべっこうの櫛を作る職人、何人かは音楽師に、そして娘のソコロは教師となり、いくつもの女学校を創設し、19 世紀中でもっとも高名な教育者となった。「頑張り屋」を絵に描いたような一家である。

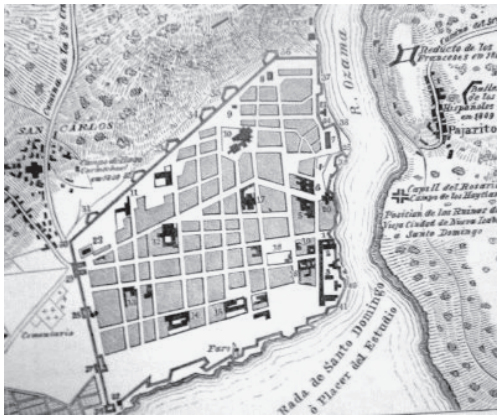
エスパニョーラ島はコロンブスが最初の航海で発見し、スペインのアメリカ大陸征服の起点となった島であった。16 世紀初頭、首

都のサント・ドミンゴ市には新世界最初の要塞、病院、僧院、カテドラル、大学などが次々に建設されておおいに繁栄したが、その後広大な新大陸が発見されると徐々に取り残されて衰退し、17世紀初めには島の西側３分の１を放棄して、人口を東側に集中せざるをえなくなった。放棄されて無人となった西側はフランス、イギリス、オランダなどの海賊の巣窟となり、17世紀末にはスペインはそこを正式にフランスに譲渡し、サン・ドマング（＝現在のハイチ）と命名され、東側の３分の２はスペイン領サント・ドミンゴ（＝現在のドミニカ共和国）と国境が確定した。フランスはサン・ドマングにアフリカから大量の黒人奴隷を導入し、砂糖きびやコーヒーのプランテーション農業を行い、国土の隅々まで砂糖きび畑やコーヒー園を作った。フランスはこの搾取により巨万の富を得たが、自然破壊と人々に与えた傷跡は消し去ることができないほど深く、未だにハイチは世界の最貧国の一つとなっている。当時サン・ドマングの人口は40万人、そのうちフランス人は３万人と、１割にも満たず、残りは黒人奴隷である。一方東側のサント・ドミンゴは人口15万人ぐらいでうち奴隷は３万人、産業は牧畜が中心だからさほど奴隷の労働力を必要とせず、もちろん白人が上層部を占めることには変わりないが、ムラト（白人と黒人の混血）や黒人の一般大衆は一様に貧しいながらも比較的緊張の少ない平和な社会だった。人口の減少はかろうじてカナリア移民の導入で補われていた。こうして北海道と同じくらいの大きさの島は二国に分断され、全く違った歴史を歩むこととなる。

1795年、スペインとフランスの間に結ばれたバーゼル条約によって、突然サント・ドミンゴはスペイン本国の都合でフランス領となった。スペインは自国に侵攻してきたフランス軍を撤退させる条件として、サント・ドミンゴをフランスに譲渡してしまったのだ。肌の色に拘わらず、自らをスペイン人と考えていたサント・ドミンゴの人々は深く傷つき、一部はキューバ、ベネズエラ、プエルトリコ、トリニダードなど近隣のスペイン領へ渡って行ったが、残った人々はようやく、自分たちはドミニカ人だということを意識しはじめる。フランスの統治は1809年まで続いた。

西側のサン・ドマングでは1791年に数万人の黒人奴隷が蜂起し、３年の戦いを経て卓越した黒人指導者トゥサン・ルヴェルチュールのもとにフランス政府に奴隷制度廃止を認めさせることに成功する。しかしトゥサンは奸計をもって捕らえられフランスに送られて、ナポレオンの手でアルプス山中の極寒の監獄で飢餓状態で獄死させられた。それが却ってサン・ドマングの黒人を奮い立たせ、ついにナポレオンが派遣した大軍に打ち勝ち、1804年ムラトと黒人の国ハイチとして独立するに至る。新大陸ではアメリカ合衆国に続いて２番目の独立国である。一方サント・ドミンゴは1809年英国の助けを得てフランスの支配を断ち切ったものの、国は荒廃し、経済は停滞していた。ハイチ政府はわれわれは兄弟であり、友人なのだから抱き合うべきだと巧妙に説得し、1822年、サント・ドミンゴはハイチに併合されてその支配下に入る。しかしこれまで全く異なった歴史を歩んできた二つの国の違いはすべての点であまりにも大きく、またハイチの統治の仕方も極めて不手際でやがてほころびが目立ち、サント・ドミンゴはハイチからの独立に向けて動き出した。

このような激動の時代を生きてきたトリニダードはこの時50才近くになっていた。非常に信心深く、家の近くのカルメン教会の信



サント・ドミンゴ市　1876 年

者グループに所属し、よく聖女カルメンの服を着て、人目を引くほどの苦行をおこない、その生活はまるで修道女のようであった。カルメン教会はもともと奴隷のために建てられた御堂であったことからも分かるように、城壁の中の西側にあたるその地域は貧しい人が多く、木の板とヤシの葉で葺いた屋根の家が立ち並んでいた。トリニダードは裁縫師であった。町でも一、二を争うほどの腕と評判をとっていたのは、ちゃんとした収入を得て人に恥じることのない生活を送ろうとした努力の賜物で、サンチェス家の伝統である。生まれてこの方、町を出たことない彼女だったが、いつの頃から町の東側にあるサンタ・クララ尼僧院に出入りしていた。そこは町の中心の富裕層の地域で、トリニダードの宗教心や勤勉さ、責任感が認められて宗教上の地位の上昇に成功したからで、結婚せずに独身を通したのもそのせいだったかもしれない。正式な修道女になるための持参金を用意できるほど裕福ではなかった。

家族への愛情は甥のフランシスコ・サンチェスに向けられ、義姉のオラヤとともにその教育に力を注いだので、彼は本格的な学問を始める前に十分な基礎教育の素地を備えていた。トリニダードは宗教や洋服仕立を通じて知り合った上流の人々に彼を引き合わせたことだろう。甥のサンチェスはベッコウの櫛造り職人として働く傍ら、フアン・パブロ・ドゥアルテの若者を導く白人ばかりのサークルに入って英語、ラテン語、哲学などを学び始めたが、それまでの家庭教育とすぐれた知性により、たちまちその中で頭角を顕わし、のちには弁護士の資格を取得するに至る。ドゥアルテ、メイヤなどが主催する、ハイチからの独立を目指す地下組織トリニタリアに入った彼はドゥアルテの信頼を得てナンバー２の地位を占め、その後も生涯を祖国の独立に捧げた。

1844 年 2 月 27 日サント・ドミンゴはついにハイチから独立して、ドミニカ共和国が誕生する。トリニダードは甥のサンチェスを通じてこの独立運動に深く関わった。彼はハイチ官憲から追われる身となるとすぐに叔母に助けを求め、その家にかくまわれた。家が捜査を受けた時には、庭にあった水がめのなかに身を隠して難を逃れる。サンチェスは友人の家を転々としながらトリニタリオのメンバーに指示を出し着々と蜂起を計画していったが、その数か月間、彼女は非常な危険を冒しながら甥の移動を手伝い、連絡係をつとめ、裁縫師であったから新しい国旗を縫ったりして、積極的に働いた。最後の決起の時には弾に火薬を詰め、スカートの下にそれを隠して町の中心にあるコンデの砦に集結した仲間のところへ運んだ。そしてコンデの砦の奪回に成功し、翌朝何百人もの人々が続々とコンデの砦に集まり民衆の動きが最高潮に達した中で、サンチェスは平和裏にハイチから政権を受け取ることに成功する。こうして独立が達成された後は、トリニダードはまた以前のように洋服仕立の仕事をしながら、足繁く教会に通う日常に戻り、歴史から完全に姿を消すはずであった。

トリニダードは最初からそれほど政治に関心があったわけではない。しかしハイチの侵略については兄ナルシソからさまざなことを聞かされていたにちがいない。ハイチに親近感をもつのはやはり黒人層であったが、彼は同じ黒人ながら上流社会の人々との付き合いが多く、その影響を受けて親スペイン派で、1822年に始まったハイチによる統治には反対だった。だから翌1823年、大牧場を廃止する法律が出された時にはハイチ政府を覆す陰謀に加わった。そして仲間とともに逮捕され、彼らが有罪の判決をうけたのに、黒人である彼だけは陰謀を報告しなかったことに対する厳重な忠告のみで放免されている。以来彼は自分の生活に閉じこもってしまったが、息子のサンチェスは成人後この一件を知って何らかの影響を受けたはずだ。だが独立が達成されたあともナルシソは、無能な人間が政府の要職につくのを見て、ドミニカ人の政治能力に絶望し、息子には常々「我々はくに（pais）は作れても国家（nacion）は作れないよ」と言い、二度と幻想を抱かず、政治に関わろうとはしなかった。彼が80才を越えた1861年、ドミニカ共和国が独立を諦めてスペイン王国へ復帰した時は密かにホッとしたくらいだった。だがそれにあきたらず再び独立を企てた息子が処刑されることになった時はいかなる感慨を抱いたであろうか。

話は1844年に戻り、秘密組織トリニタリオは独立の源動力となっておきながら、最後の段階で保守派と妥協せざるを得なくなる。そして独立が達成されたあと、両者の間に権力争いが起こり、敗北したトリニタリオのドゥアルテ、サンチェス、メリャなどの主要メンバーは国外に追放されてしまった。一旦は元の生活に戻ったトリニダードであったが、1844年の暮から、甥のサンチェスなど追放されたメンバーを密かに帰国させ、政権の転覆を図る企てに加わる。しかし密告によって彼女とサンチェスの異父兄アンドレスなど4人が逮捕され、死刑判決を受けた。誰も口を割らなかったから、首謀者の名は最後まで分からずじまいであった。トリニタリオのメンバーが国外追放で済んだのにくらべると刑が重すぎるのは、大統領サンタナの独裁者としての地位が確立し、反対派を恐れずに誰はばかることなく厳罰に処すことができたからである。処刑の日は2月27日、4人が命がけで働いたあの独立の一周年記念日である。それはいかに独立に尽くしたものでも現政権に刃向かうものは容赦しない、という警告であった。

トリニダードは首謀者の名を明かせば死刑を免れると言われたが、「そうすれば私は助かってもその人は殺されるでしょう。それでは国家のためになりません。私は自分が殺される方を望みます」と毅然と言い放つ。4人が砦から市をとりかこむ塀のそとにある墓場まで連行される時、尼僧たちが「名前を言ってしまいなさい」と口々に叫ぶのだが、トリニダードは気持ちが揺れないように両耳を塞ぐのだった。40才で老人と呼ばれた時代、痩せて髪の毛の縮れた51才の黒人の彼女のどこからそのような力が湧いてくるのか誰もが訝った。彼女は最後まで平生心を失わず、死に際して醜い姿を見せることのないように自分で縫ったズボンをスカートの下にはき、刑場では兄ナルシソにスカートのすそを縛ってくれるように頼んだ。

今ドミニカ共和国の一地方にマリア・トリニダード・サンチェスの名が冠されている。中南米諸国の独立や革命には多くの女性が貢献したが、その名が歴史に残ることは少ない。

（いとう・しげこ）